



よね ざわりよう 米沢 諒さん (27) = 会社員 (アイヌ文化ガイド)

— お生まれは？
カンボジアです。母がアフリカのソマリア出身で、兄たちはソマリアで生まれました。日本には私が10歳の時に移り、それからは東京で育ちました。父方が日高管内新冠町のアイヌの家系なのですが、そのころはまだ日本国籍としか知りませんでした。日本をほこりに思っていたので移住を楽しみにしていたのですが、日本では黒人としか見られませんでした。いじめを受けることもあったし、兄たちもよく警察官に呼びとめられていました。
— アイヌと知ったのは？
19歳です。父がアイヌだと聞き、その時はおどろいて「アイヌって何だ」と3日間考えこみました。そして自分は「日本人らしく見られよう」と強く思いこんでいたと気づきました。でも自分にはソマリアにもアイヌにもルーツがある。何者かを決めるよりは、折にふれて考えれば良いと思うようになったんです。
日本に来たので、ソマリア

先祖の文化知って大切に

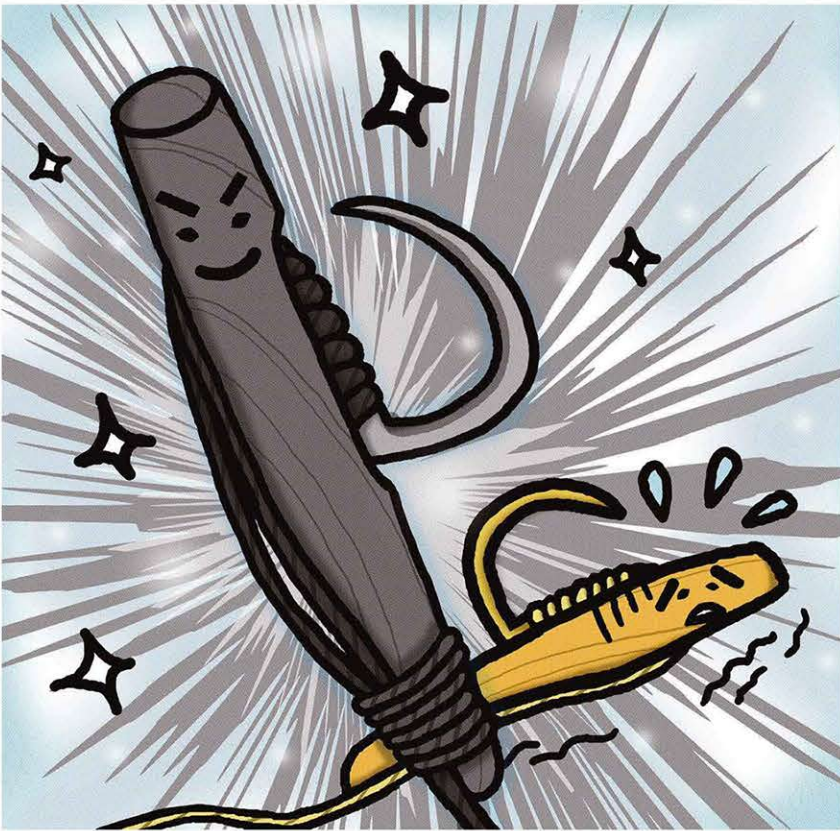
のことを何も知らないことを申し訳なく思っていました。でも、アイヌについても知りません。兄たちはソマリアについては少し知っていましたが、もう社会に出ていたので、アイヌについて時間をかけて学ぶことは難しかった。そこで、家族の中でアイヌについて知る役割は自分が担おうと考えました。それから札幌大学に進みました。
4年生でハワイの大学を訪れた時、先住民の言葉で授業をしていることに感動しました。アイヌ語で同じことをしたいと思い、胆振管内白老町の博物館で3年間学びました。
— 読者に一言。
世界にはさまざまな民族、宗教、文化があります。みなさんにも先祖の文化があります。ぜひその文化を知って、大切に受けついでいってほしいです。
◇ このコーナーでは、さまざまな仕事をするアイヌの人にインタビューします。

タンベエヘラムアイン？

■ マレク

サケは大事な食べ物。場所により、あみやしかなどいろいろなとり方があります。マレクは長いさおの先に鉄かきがついた道具です。かきはさおの先を向いて、これでサケをつきます。かきはさおにほったみぞにはめこまれていきます。かきがサケにささると、さおから外れ、サケがさおの先にぶらさがるようになります。大きなサケがいくつから暴れても、かきがぬけてしまつことはありません。明治時代になり私たちの住むこの土地が日本になると、川でのサケ漁は禁止されました。同じころ、暮らしの中のいろいろなことが禁止され、中には和人の考え方に合わないだけで禁じられたものもありました。これからの社会では、アイヌがとりもどしたいと思う文化が復活していくと私は信じています。
(岩谷実咲・札幌大学ウレシバクラブ3年生)

金のマレクと銀のマレクを出している。銀のマレクは勇気を見せた



私はむしように腹が立つてきて、刀をぬき「これならどうだ！」といって、いろいろのくいを足でふみつけ、お姉さんの顔の前に刀をつきつけました。お姉さんはおそろしくて、泣きながら訳を話しました。「私たちにはお父さんとお母さんがいたんだよ。お前が生まれたころ、石狩川が海に流れ出るところの近くに、大きなトウクシシ（アメマス）が出て、川をふさいでしまった。それでサケたちが上つてこれなくなつてみんな困つてしまった。それで、ゆうかなん人たちがトウクシシを退治に行くことになつてお父さんとお母さんも出かけて行つた。でもそれきり帰つてこない。きつとトウクシシに殺されてしまったのだと思うと悲しくて」
それを聞くと私はじつとしていられなくなり、部屋のおくの宝物が置いてあるところへいって、金と銀のマレク（かきもり）を見つけた。金のマレクに向かって「これから化け物トウクシシをやつて行く。一緒に行ってたかかってくれ」とおいのりする。金のマレクはカタカタカタとぶるえはじめました。次に銀のマレクに向かっておいのりすると、銀のマレクはすうと立ち上がり、これは良さそうだと思う、そのマレクを持って石狩川に向かいました。

トウクシシ（アメマス）とのたたかい。勝ったのは男の子だった



ところが、だんだん大きくなるうちに分かつてきたのですが、歌を歌っているのだと思つていたのは、お姉さんの泣き声だったのだ。お姉さんは私をおんぶして水をくみ、たきを拾いながら泣いていたのです。私はお姉さんに泣いている訳を聞いてみましたが、お姉さんは「なんでもないから」といいます。それから時々訳を聞いてみのですが、決して教えてくれませんでした。そのうち私も大きくなつて、仕事ができるようになってきました。ある日、今日までお姉さんに訳を話してもらおうと思つたすねました。「お姉さん、何か困つたことでもあるの。それとも何かほしいものでもあるなら、アクセサリーでも何でもプレゼントするよ」と言ってみました。お姉さんはいつとも同じように答えません。

お姉さんは 弟 をおんぶしながら働いた。歌だと思っていたのは泣き声だった



川に近づくと、トウクシシに殺された人たちのものか、あちらにもこちらにも、たくさん人の骨がころがっています。見るとほんとうに、大きなトウクシシが川をふさいでいました。私は力いっぱいマレクを打ちこみました。トウクシシが少し体を動かすと、あつという間にこのところまで川の中に引きこまれます。私も負けずに引っぱり返し、岸辺近くまで引き寄せます。そうして長い間引つ張り合いをして、とうとうトウクシシをおかき上げてたおしました。
それから辺りを歩き回つて、お父さんとお母さんの骨を探しました。2人の骨を並べて生き返らせるためのおいのりをしましたが、何も起こりません。よく見ると、小指の骨が1本足りないのです。そこで、木の枝を折つてきて、骨の代わりに並べました。そうしておいのりすると今度はうまくいきました。お父さんとお母さんは、目をこすりながら起き上つて「なんだ、まだねていたかったのに」なんて言っています。でもすぐに、トウクシシとたたかつて死んだことを思い出して「息子のおかけで助かった」といって泣いて喜びました。そこで、お父さんとお母さんと一緒にお姉さんのところへ帰り、それから

ひかえめな存在が活躍

このお話はカムイユカラ（神話）の一つで、リツトウンナという言葉を聞に入れながら歌つたようにお話しします。
主人公の男の子は、ただの子供ではなさそうです。大人たちでも負けずお化け魚をたおすし、魔法を使うし、おこりっぽい。アイヌのお話には、いちばん小さくて弱そうな子供が、じつはすごい力を持つていて大活躍する話が多くあります。金と銀のマレクでは、金の方がりつぱそうに見えますが、見た目の美しさよりも、ひかえめな銀のマレクが勇気を見せました。これも「大したことない」と思われているものが活躍する話ですね。トウクシシは川にすんでいて、食用に利用されてきた身近な魚ですが、なぜかお話にはお化けとしてよく登場します。地面の下で地震を起こすのもアメマス。日本ならナマズですが。



銀のマレク

千歳市の話